



兵庫県知的障害者施設家族会連合会

第 43 号

救 助 艇

弁護士 田中 幹夫



びわ湖から南に向かって流れ出る瀬田川の清冽（せいれつ）は、まもなく南郷の洗い堰で水飛沫をあげ美しい風景を作っています。そこから西の方を眺めると緑に包まれた優しい丘があり、その上に白い尖塔（せんとう）を持つ洋風の建物がありました。それが滋賀県立近江学園で、私は 1955（昭和 30）年 11 月から翌年 3 月まで、実習生として恥の多い日々をそこで送ったのです。

私は友人と二人で古い木造の医局棟に寄宿しましたが、最初の日には早朝 6 時ごろ田村一二先生に叩き起こされ、寝ぼけ眼で講堂での朝礼に参加しました。講堂に掲げられた額には、「四六時中勤務・耐乏の生活・不断の研究」とあるので、「これは大変な所に来た」と思いました。案の定、食事は一汁一菜で主食は玄米です。職員の皆さんは障害児と起居を共にして同じものを食べます。

私は、寒風の中を子どもたちと一緒に走りまわる雰囲気が好きでしたが、少し馴れてから図々しくも糸賀先生に向かって「労働法上問題はないのですか」とお尋ねしたことがあります。先生のお答えは「法律を守っていて福祉ができるかね」と簡単なものでした。学園は児童福祉施設ですが、既に年齢超過の子どももいました。糸賀先生はそのことも含めて

「法律なんてものは後からついてくる」とおっしゃったのです。

たしかに障害福祉の法は後からついてきたし、福祉労働者の待遇も実状を追って以前より少しは良くなってきました。糸賀先生の「救助艇」と題する未完の文に「政治も社会もまるで狂乱のような世相の中で 130 名の園児を抱え、ここが我々の死に場所だと心に決め、力の限り奮闘を続けてきた」というくだりがありますが、糸賀先生たちの死に物狂いの努力が今日につながったのだと思います。

あの有名な「この子らを世の光に」という言葉を、私は実習中に一度も聞いたことがありません。人間の命そのものの価値を尊重する糸賀先生の「福祉の思想」からすれば当然のことで、先生があえてスローガンのような言葉を使われたのは、世間の差別的な風潮を打ち破るためだったと思います。研修会の講義中、それも「この子らを世の光に」という意味を言いかけてお倒れになったのは、何とも悲しく象徴的なことでした。

わが国では、新自由主義の政策が進められるようになり、安倍内閣は「一億総活躍」などと戦争中のスローガンを復活させています。役に立たない人間は無用だと高言する国会議員があり、「この子らを世の光に」と唱えるだけで体制に従順な福祉関係者がおります。運命の共感者たちで集結した「全施連」が逆巻く大波にどう立ち向かうか、心から期待しています。

【事務局】〒650-0016 神戸市中央区橋通 3-4-1 神戸市立総合福祉センター2F 事務局(月～金 9:00～17:00)

電話 078(371)3930 FAX078(371)3931 Email : h-kazoku-net@alpha.ocn.ne.jp

発行人／兵庫県知的障害者施設家族会連合会（ひょうごかぞくねっと） 編集人／広報委員会

URL : <http://h-kazoku.ivory.ne.jp/> 平成 30 年 12 月 25 日発行 第 43 号 表紙題字／沼野 聡美 氏

第14回全国知的障害者施設家族会連合会 全国大会 in ひょうご

平成30年10月23日(火)・24日(水) シーサイドホテル舞子ピラ神戸で開催

「今から始める第一歩～福祉の後退を許さない～」をテーマに、1日目は厚生労働省の行政説明、泉房穂明石市長の「やさしい社会を明石から」と題した記念講演、他県の方と親睦を深めた交流会。

2日目は、「どうする?家族とわが子らの高齢化」をテーマに全員参加型討論会が行われ議論を深めました。全国から約600名が参加、兵庫からは355名もの方がご参加いただき、盛会のうちに終了致しました。



〈実行委員長 木村三規子よりお礼〉

皆様お一人おひとりの温かいご支援とご協力のもと無事開催することが出来ましたこと御礼申し上げます。又当日の不手際や、ご迷惑をおかけしましたこと心よりお詫びいたします。第15回全国大会でも皆様にお会いできることを楽しみにしております。～感謝～

全国大会実行委員を経験して

こうべかぞくねっと 神戸光生園家族会 池田 雅美

1年前の平成29年10月23日に第1回の全国大会実行委員会が開かれ、「全国大会 in ひょうご」開催に向けてスタートしました。私は全国大会がどのようなものなのか想像すらできないほど何も知らなかったもので、まさにゼロからのスタートでした。

実行委員会では、大会のテーマを決めるとき、皆さんそれぞれの思いが強くなって、空気がピリピリと重苦しくなってしまう時や、スケジュール通りにいかなくて、どうしたら良いのか困ってしまうこともありました。実行委員のメンバーは、兵庫県の各地から、月に1回神戸に集うので集まるだけでも大変です。それでも会場選び、講演の依頼、冊子の印刷、広告の募集

等々、重要なことを次々と決定していきました。それぞれの役割に責任を持ち、今まで進んだこと、困っていることを報告し合い、これからしなければいけないことを確認して、また各地区に戻ってやるべきことを進めていきます。大会を主催する側に携わり、形にしていくことの大変さが身に染みてわかりました。「できる限り質素(経費削減)に、できる限り中身の濃いものを。研修・議論よりも全国の家族が集まって交流・情報交換の場に」を大会指針にし、実行委員全員の熱意とチームワークで「第14回全国大会 in ひょうご」は開催されました。

全国大会1日目(23日)は、厚生労働省から「障

「害保健福祉施策の動向」をテーマに行政説明を片桐氏にさせていただき、これまでのデータに基づき、今取り組んでいることや見直していくことなどを分かりやすく説明していただきました。休憩をはさみ、明石市長の泉氏に「“やさしい社会 “を明石から～誰もが安心して暮らせるまちをつくろう～」をテーマに福祉への熱い思いを講演していただき、聞いている方たちのハートを震わせる張りのある声でお話をいただきました。18 時からの交流会では、おいしい食事と灘のお酒や神戸ワインを楽しみながら話に花が咲き、タヒチアンダンスのイベントがより一層交流会を盛り上げてくれました。

大会 2 日目 (24 日) は、全員参加型討論会が開かれ、施設側と家族側からそれぞれ意見が出され、会場からは活発な議論がされました。両日に渡り、会場前のロビーでは兵庫県の 8 施設が代表して、それぞれ自慢の作品を展示販売し、たくさんの方で賑わいました。

私は全国各地から、多くの方に参加していただき、たくさんのお話を聞くことで、疑問に思ったり、納得したりして自分にできる事に気付けると思いました。

主催する側では、今回で気が付いた改善箇所は次回開催者に伝えて、より良い全国大会にしていけるようにしたいと思いました。

私が特に印象的だったのは、2 日目の全員参加型討論会の呉氏のお話から「親亡き後のために、親から子へのラブレターとして、後を託す方のための書き込みノート“きずなノート”の販売をしています」と紹介をしていただくと、売れていなかった本が次々と売れていきました。このことから、今の状況をお知らせすることは重要で、障害者ご本人やご家族に限らず、普段、障害者の方を避けるようにして過ごされてきた方にも、障害者ご本人やご家族がどのような思いで暮らしているのか、情報発信をしていかなければいけないと思いました。また情報発信の方法も工夫し、多くの方の心に届くようにしていくことが、これからの課題のように思いました。



実行委員集合写真 (大会前日準備)

親の思い

かけがえのない人生をいきいきと、安心して暮らしていけることに今何が一番大切か

西中・播磨かぞくねっと いちょう園保護者会長 木村 政照

最近の報道関係から・・・「障害者雇用不正『処分なし』は通らない」「国は障害者雇用の本質学べ」こんなタイトルの記事が連日のように目に入る昨今、残念でたまりません。障害者をもつ親として「これは何？」と疑うのは私だけでしょうか。ましてや「長年にわたる組織上の問題であり…」との弁明、これでは、官民上げて取り組んでいる「障害者の雇用促進・自立支援制度」等が骨抜きにさらされることとなり、国民は中央省庁や地方公共団体に怒りと落胆を感じざるを得ません。

記事の内容を読む限り、目を疑うことが多くあり、細かいことは別として、滑り出しの時点において障害者の位置づけ(定義)がしっかりしていれば簡単な話と解釈することは間違っているのでしょうか。三障害が一元化されて久しい今日、何れにせよ障害者問題は其々奥が深く特徴があり、当事者や支援者に相当寄り添う、《我がこと化》の姿勢がない限り、いくら歯切れの良い言葉、美辞麗句を並べても私たちが願っている本人、家族が安全で安心して生活できる居場所づくりには程遠く繋がらないのではと…大変憂慮している今日です。

平成 28 年 7 月の相模原障害者施設殺傷事件で息子様が犠牲となられたご遺族から、「ここで声を上げなければ後悔する。息子に申し訳ない」との切実な願いからの手記が公開されました。『障害者にもっと目を向けて』今回の件をきっかけに、『障害者についてもっと議論してほしい』と。私たちもこの願いを重く受けとめ、共に声を大に世に訴えていかななくてはなりません。

障害者問題はもとより、私たち一般社会における諸問題においてもしかり、本質に向き合う心底からの真摯な議論展開を望みたいものです。嘆いていても仕方がない。待っていても誰も解決してくれない。

今こそ、私たち家族会は「施設と共に」「この子らを世の光に」一致団結・強固な連帯のもと前進させようではありませんか。(次ページ 施設紹介)

社会福祉法人佐用福祉会「いちょう園」は、昭和 57 年に法人認可を受け、現在で 36 年経ちました。時代の流れに呼応した利用者・保護者をはじめ、地域のニーズ(地域貢献)、に開かれた施設「障害者支援施設 いちょう園」として進化を続けています。

◎施設側：「私たちはご利用者の視点に立ってサービスの提供を行ないます」

私たちの誇り〈物心両面にわたる古いイメージからの脱却〉

◎利用者側：本人、家族が安全で安心して生活できる居場所づくり

私たちの誇り〈保護者会の我がこと化と会員相互の絆・一致団結協力〉



リレー随筆 「紗央里とともに」

東・北播磨・淡路かぞくねっと 希望の郷保護者会長 高田 満

昭和の終わりの5月、紗央里は誕生した。3年前に生まれた長女に比べると、手のかからない育てやすい子どもであった。それが3歳を過ぎても全くことばが増えず、1歳半の頃にはしゃべっていた喃語らしきものも消失し、夜泣きや噛みつきが出現すると共に、どう育てていったらよいかわからない子どもになってしまった。その頃、私は中学校に勤めていて、教師の多忙さは今も昔も変わらないが、生徒指導や部活動にあけくれ、月に1回休みが取れるかどうかの生活をしていた。妻は子育てに疲れたのか、突発性難聴になり、このままではダメだと思った私は、自分の環境を変えることが大切だと考えた。ただ、自分の都合だけで異動することは申し訳なかったので、担任する生徒が卒業した平成6年4月、養護学校(今は特別支援学校)によろやく転任することができた。



養護学校では部活動をする気はなかったので土・日の時間は自由に使うことができた。家族4人で出かけたこともあったが、多くは、紗央里と私の2人だけで出かけた。コンビニでお弁当を買って山登りに行ったり、雨の日は電車・バスに乗って、大阪や京都に出かけたりした。山登りの時はそんなに大勢の人と出会うことはないが、電車・バスの時は大勢の人が居て、人の動きに注意が行くのか、そのことでトラブルとなるようなことが増えてきた。たとえば電車に乗る場合、降りる人の足の動きが気になり、それを見ていると自分が乗るタイミングが合わなかったりして、結局乗り過ごしてしまうことが何回もあった。同じようなことがエレベーターや自動扉でも見られるようになった。旅行も好きで楽しみにしていたが、部屋に入るまでにそういったことがあると、一緒に行く者が嫌になってしまう。長女は高校生の時から一緒に行かなくなった。でも、紗央里は旅行を楽しみにしているので、私と妻は何とか連れて行ってやりたいとの思いから、コテージに泊まることになった。食事も自炊なので、レストランに行って食べるわけでもない、家で暮らすのと変わらないが、途中のサービスエリアで何か買ってもらえるので、そんな些細なことが本人の楽しみであった。

昨年は希望の郷の一泊旅行に参加することはできなかったが、今年は天気も良く参加することができた。最初は私も一緒に参加するつもりであったが、全国大会の実行委員会と日が重なってしまい、参加することができず本人1人だけで参加することになった。旅館を貸し切りにさせてもらったり、事前の細かなタイムスケジュール、支援員さんの丁寧な関わりがあり、淡路旅行は笑顔で過ごすことができた。親ではできない経験をさせていただけただけのことに対して、感謝の気持ちでいっぱいである。これからの生活の中で、このような良い経験が増えていってくれることを望んでやまない。

〈編集後記〉1年前から準備してきた全国大会も無事終わりました。皆様お忙しい中にもかかわらず、ご出席いただきましたこと感謝申し上げます。全国大会の詳細・写真は、全施連ホームページ→リンク→会員専用ページに掲載しています。